

特集：多様な端末と大規模学習データが拓く新たな学習支援環境

## eラーニング専門家養成大学院におけるコンピテンシーに基づいたポートフォリオ作成活動の試行

根本 淳子<sup>\*,\*\*</sup>, 竹岡 篤永<sup>\*\*,\*\*</sup>, 高橋 暁子<sup>\*\*,\*\*</sup>, 鈴木 克明<sup>\*\*</sup>

### A Practice of Competency-based Portfolio for Online Graduate School of Instructional Systems

Junko NEMOTO<sup>\*,\*\*</sup>, Atsue TAKEOKA<sup>\*\*,\*\*</sup>, Akiko TAKAHASHI<sup>\*\*,\*\*</sup>, Katsuaki SUZUKI<sup>\*\*</sup>

#### 1. はじめに

教育場面においてのポートフォリオは、学習活動の成果を蓄積し俯瞰することのできる有用なツールである。学習者自身が学習成果を客観的に捉え評価することができ、さらに、仲間や教員からのフィードバックを得ることもできる。デジタルツールも幅広く存在し、学習成果の蓄積によって成果の証拠を残すだけでなく、学習活動のプロセスや学習活動の振り返りを実現し、学習者の学びを深めるためのツールとして活用が期待されている。

ポートフォリオの活用はその目的や環境によってさまざまであり、仕組みづくりもそれに応じて大きく変わる。筆者らは、ポートフォリオの活用が、カリキュラム全体の学びの成果を俯瞰し、学習者それぞれが得た成果群を統合的に捉えるなど、学習成果を振り返る機会として有用である点に着目し、eポートフォリオを導入してきた。ポートフォリオの活用によって生じる深い学び（フォリオシンキング）には、リフレクションと統合が挙げられ<sup>(1)</sup>、本論が対象とする大学院プログラムの専門家養成の中でも、この二つのスキルを重要と捉えて、授業内外で多彩なアプローチを試みてきた。

本研究は、コンピテンシーベースの学習成果評価活

動にeポートフォリオを導入し、その段階的な活用が、学習者にとってどのような効果を持つのかを実証的に明らかにすることを目的としている。

本研究の対象は、ポートフォリオの活用を正規の活動としてカリキュラム内に組み込む前に行った試行である。試行では、当該大学院の博士前期課程1年目の入学直前・前期終了時・後期終了時にポートフォリオを活用することを推奨した<sup>(2)</sup>。本論では、この実際の活用状況についての観察・調査結果を踏まえ、ポートフォリオの導入の現実性を確認しつつ、導入によって得られるであろう利点と運用のポイントをまとめる。

ポートフォリオ活動を実現するためのシステムとしてはMaharaを用いた。本稿では、Maharaをeポートフォリオと呼ぶものとする。また、学習者がコンピテンシーベースに自分の学びを自己評価した成果物である、Maharaシステム上の作品（コレクション）をポートフォリオと呼ぶ。

#### 2. 実践と結果

##### 2.1 対象活動

対象としたA大学院のカリキュラムは、修了時に身につくコンピテンシー（コア12、オプション7）をもと

\* 愛媛大学大学連携 e-Learning 教育支援センター四国愛媛分室 (Ehime University Branch of University Consortium for e-Learning, Shikoku Center, Ehime University)

\*\* 熊本大学大学院教授システム学専攻 (Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University)

\*\*\* 高知大学大学教育創造センター (Center for Higher Education Development, Kochi University)

\*\*\*\* 徳島大学総合教育センター (Center of University Education, Tokushima University)

受付日：2015年6月8日；再受付日：2015年10月29日；採録日：2015年12月25日